

願ひしているだけなのです。お坊さま。どうか助けてやってください。願ひいたします。」と、洗いものをしていた手をとめて跪き、合掌して願ひしました。

「それはそれは、お気の毒なことだ。病人がどんなぐあいかみせてください。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

老婆は、しなびた腰を折りまげ、前にのめるような姿で、お坊さんの先に立つて、急いで自分の家に案内しました。

お坊さんの立つたその家は、間口も狭く、とんぼ口のところには、土のついた鍬や鎌が腰板にかけられ、ハケゴや笠などが無ぞうさに置かれ、とんぼ口の片側には便所があり、

その反対側には、馬小屋があるものですから、家の中からは異様な臭いが鼻をつきました。

とんぼ口の奥には、いろりがあり、そのまわりに病人が横たわっておりまして。土間に藁をならべ、その上にむしろを敷いたところにセンベイ布団の病人がいるのです。

あぶら気のない髪は、ねぐせがつき、ほおはおち、身はやせおとろえた姿は、見るもあ